

味のことは具象か？ 抽象か？

Is the expression of taste abstract or representational?

阿部 明典 *1

Akinori Abe

*1 千葉大学 文学部 人文学科 行動科学コース/ドワンゴ人工知能研究所

Division of Behavioral Science, Faculty of Letters, Chiba University/Dwango Artificial Intelligence Laboratory

Recently we have been discussing how to express the taste of Japanese sake. During describing the taste of Japanese sake, we found a question whether the expression of the taste is abstract or representational. Previously, I discussed the effect of drawing the taste. The drawings can be regarded both abstract and representational. Because they were drawn because it was quite difficult to express the taste by words. Accordingly they may be abstract. However, if we change the viewpoint, it can also be regarded representational. Because they described the taste which we could not see.

1. はじめに: (酒の) 味は、抽象？ 具象？

私の学生の只木に OS「身体と触覚の重層的な認知」に投稿を(やや無理やり)勧めているときに、彼女が言ったことが、「絵を言葉で表現するのが抽象画と具象画で違いそうとこみたいな話かなあ... という程度しか決まってない」であった。それに関して、オーガナイザの福島氏と、

阿部: 個人的には、形のない酒は抽象画かなあ...

福島: 個人的には酒は視覚刺激ではないですが感覚を描いているのでかなり具象です

という話をした。全く対立している意見が出たのである。しかし、どっちも正しそうである。私は味には(液体としても)形がなく、表象的ではないので、抽象に入るのかなと単純に思った。しかし、湖や海のような水の光景を描いた絵は具象と考えられている。例えば、国立西洋美術館の Gustave Courbet の「波」は岩以外はほぼ水と空が描かれている。空、波の形象もあり、具象といえよう。しかし、水面をテーマとした絵はやや微妙かなという感じである。波紋はあり、具象といえば具象と言えるが、見方によっては、抽象かもしれない。例えば、Ai Shah の作品 (<http://news.rabbitalk.com/archives/real-minamo-aburae-ai-shah.html>) は、展覧会の説明によれば、「あらゆる外的要因によって水面に生まれる静かな波紋。その一瞬を写実的に描いた作品」であり、基本的には、具象画であろうが、その精密さ故、抽象画にも見えるのである。日本酒自体を絵で描く訳ではないが、味を表現する時には頭の中に“味の絵”を描いているはずである。それは、具象であろうか？ 抽象であろうか？ 本論文は、それに対する一つの答えを出すものとするものである。

2. 日本酒の味の表現

2.1 日本酒の表現は少ない？

以前も書いたが、日本酒にはワインのような味の辞書は余りない。せいぜい、福島で作成した「日本酒味わい事典」

[Fukushima, 2013a] くらいであると思う。従って、日本酒の味を記述するときはライターの方々の感性で描くことになる。ワインであれば、BC Liquor Stores, Vol. 19, Issue 2 (summer 2017) に Quail's Gate Pinot Noir (2015) に就いて以下のような記述がある。

Elegant and sophisticated, this Burgundian-style Pinot Noir expresses bright strawberry, red cherry and spice with hints of forest floor and earth. Medium-bodied with fine tannins, this will pair well with salmon.

[Abe, 2017b] に次のように書いたのだが、“In fact, “hints of forest floor” is frequently used phrase for nice wines. In addition, “forest floor” is used for matured wine. A forest floor is defined as the above-ground layer of a forest made up of tree roots, soil and decaying matter (Collins English Dictionary). Thus the taste of wine can be imagined as a *soil and decaying* (matured) taste and flavour. The richly organic layer of soil and debris is a characteristic of forested land. This will also be a characteristic of the wine. This phrase can become a type of a good metaphor.” 基本的に、記述だけで涎が出るような味を感じることができる。英語というやや論理的な言語のせいかも知れないが。日本の場合、味以外に作った人の個性なども書かれていることがある。畑の土が固いなどの情報はブドウの生成に対して影響を与えると思うが、「御年 79 歳のフェルナンデスさんの人生をかけた *1」などの記述があると、最近、売れ行きをよくするために、商品に物語を付けるとよい [Jensen, 1999] ということ指摘されているとはいえ、このような根性/人生物語は日本的なのかなと思う。

日本酒の場合、以前の論文でも紹介したが、「LOVE ♡ 日本酒!」, 2014, 2 Gakken」の場合、以下のような記述がある:

- 醸し人九平次 Eau Du Desir 2012

口にした瞬間は果実のフレーバーが強く感じるものの、適度な熟成を経ると蜂蜜やバニラの香を覚えます。旨味は

連絡先: 阿部 明典, 千葉大学 文学部 人文学科 行動科学コース, 〒 263-8522 千葉市稲毛区弥生町 1-33, ave@ultimaVI.arc.net.my, ave@chiba-u.jp

*1 El Vinclo 2010 に対して「Real Wine Guide 第 52 号 (2016, Winter), リアルワインガイド 2015 年旨安ワイン」に書かれていた。

華やかな酸を軸に広がりますが、ミネラル感が下支えるため全体的には立体的な味に。....

- 而今 純米吟醸 八反錦

口に含んだ瞬間、その芳醇な味わいに驚かされます。また酸と旨みのバランスも絶妙! さらに切れの良さも感じられるので、女性でもススイと飲めるはず。....

「醸し人九平次」に関しては、味を具体的に描いているが、「而今」に関しては、余り具体性はない。ワインのような辞書がないせいであろうか?

おいしさの表現辞典 [Kawabata and Fuchigami, 2016] という本がある。この本は、様々な文献から味に関する記述を集めている本である。7-2 嗜好飲料類の項目にお酒に関する記述が集められている。日本酒に関しては、あまり多くない。ソムリエ田崎の本と「おしんぼ」からの記述が多い。更に、それ以外は、味の記述ではなく、酒を飲んでいるといった情景の描写が多い。小説に酒の味を事細かく書いても仕方ないので、書かないのかもしれないが...

酒屋の記述はどうであろうか? 筆者の大学のそばにあって、よく使っている「酒舗にうら」の facebook (<https://www.facebook.com/syuhonishiura/>) にある記述をお借りする。「鳴海 特別純米 直詰め生【白】」に関しての記述 (2018 年 1 月 27 日) である。「甘みのある米の旨みと酸のバランスがとても良いです。黄色い柑橘や白い果肉の果実のジューシィさの後に麴の香ばしさを感じます。ガス感もきめ細かくチリチリと口の中を刺激して、キレ良くフェイドアウト。程よくふくらみのある旨口のやや辛口です。」かなり具体的な味の記述をしていると思う。この酒は入手しているが、原稿を書いている時点ではまだ飲んでいない... が、鳴海の味作りに近い味の表現だと思う。「ジューシィさ」、「チリチリ」、「フェイドアウト」というカタカナことばでも表現しているが、表現に冷たさや固さは感じない。それどころか、新酒のまだ不安定な味をうまく表現できているのではないかと思う。酒屋なりの表現ではないであろうか? 更に、「この酒は、社長君塚が冬場に日々魂を込めて作り出す麴と、千葉県独自の食米「ふさこがね」のポテンシャルを最大限に引き出す発酵技術により生まれたハイパー旨口酒です。」といった、日本人好みの「魂を込めて」という物語も付け加えられている。

2.2 日本酒の表現を形で?

上記したものは、味のメタファー的な記述である。味そのものは、普通には、目に見えない。従って、目で見たとしたら、譬え話になる。例えば、瀬戸は「味ことば」を、メタファ、メトノミー、シネクドキを中心にして、共感覚表現 (双方向性を持つ) から説明している。つまり、味は比喻のようなもので表現出来るし、触覚・嗅覚・視覚・聴覚を用いて味覚を表現していると示している [Seto, 2003]。例えば、「チャック・マサラはガラン・マサラの辛味に黄色い唐辛子の丸みのある辛さが足される」のように、視覚が味を表現するために使われるのである。この場合、辛いという感覚は突き刺すようなので、尖ったという視覚を伴うと思われるが、余り辛くないという感覚は、尖ったものが無くなったという意味で、丸いという視覚が使われているのである。

日本以外では、Velasco が、roundness/angularity という形と基本的な味の関係を実験した研究がある [Velasco et al., 2015]。その結果から、Velasco は、人間は味のことばを無矛盾に形に当てはめることが出来ると結論づけている。そして、この結果から以下のように言えるとして

いる。“...there was a distinction between sweetness which was matched to roundness, and other tastes (bitter, salty, and sour) which were matched to angularity instead.” なんとなく、この指摘は我々の直観と合っているように思われる。苦かったり、酸っぱかったりすると、尖っているのである。この実験では、辛いが入っていないが、辛いも尖っているはずである。例えば、[McQuaid, 2015] では、「トウガラシの辛さは痛みを伴うが、快楽ももたらしてくれる」と書かれている。余りに当たり前すぎて Velasco は、実験しなかったのであろうか? ちなみに、Velasco の実験で使われている絵は、綺麗な正方形や丸もあるが、それ以外は落書きのような絵である。味のイメージとしては使えるが、味の記述としては雑かも知れないし、決して味を表してはいないと思う。ちなみに、ここで使われている絵は、抽象画と言われれば、抽象画とも言えるかも知れない。

絵といえば、日本酒のラベルにも絵が描かれている。日本酒×作家創作プロジェクトの「日本酒ものがたり」 (<http://sakemono.com/>) 日本酒に宿る物語を、作家が描き出すという意向で行われている。「華姫桜 しずく 媛 無濾過純米吟醸原酒」のラベルにつけられている絵が 図 1 に示すものである。アニメチックな絵である。



図 1: 華姫桜 しずく 媛 無濾過純米吟醸原酒」のラベル

この酒は、無濾過純米吟醸原酒なのであるが、味は、期待と反して熟成感満載であった。ホームページを見ると、137 歳というキャラ設定があるので、熟成なのかも知れない。しかし、ラベルの女性と実際の味は釣り合わないと思った。少なくともこのラベルと見た時に期待した味ではなかった。この絵は、蔵としてのお酒のイメージを表しているかも知れないが、味は表していないような感じである。具象画が描かれているが、味を全く表現していないので、本論文で議論している絵とは違っている。ちなみに、アイドル好きにこの酒を売るのなら、成功かも知れない。

IJCAI2017 で開いたワークショップでも示したが、味を表現する時に全てことばで記述するのは難しい。もしかしたら、後でゆっくり考えると表現できるかも知れない。しかし、限られた時間で描くとなるとことばが思いつかない、口に出てこないことが多い。大塚、諏訪、山口が行っているようなオノマトペ [Otsuka, Suwa, and Yamaguchi, 2015] なら、すぐ出るのかも知れない。しかし、再現性は、私には難しいと思われる。従って、私が表現するときはどうしても絵の助けを求めることが多い。それは味の位置であったり、形であったり、動きで

あったりする。最終的には電子文字に書き起こししないといけないので、この絵を頼りに、飲んだ時の記憶を辿りながら文字起こしもするのである。

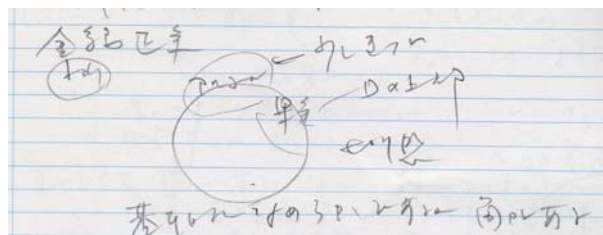


図 2: 酒の味を表現する時に描いた絵 (味の位置)

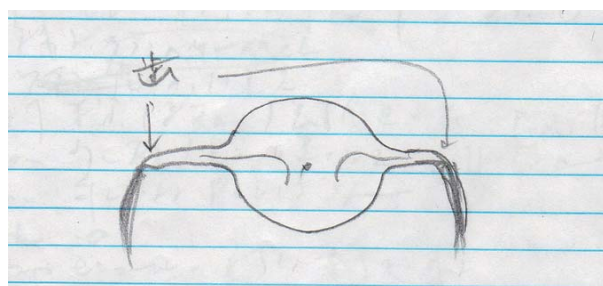


図 3: 酒の味を表現する時に描いた絵 (味の存在感)

例えば、図 2 は、金鶏正宗 京仕込特別純米生原酒の味の記述であるが、この絵では、味の位置を示している。恐らく、味が色々な場所に点在しており、それをまとめて書くことが出来なかったのが、このような絵を描いたのだと思う。図 3 は、自然郷 セブンの味の記述であるが、この絵では、味の動きなど、口の中での存在感、味の流れる形を描いている。この場合、味の動きを文字でうまく書けず、絵を追加したのだと思う。この絵では使っていないが、矢印で味の流れる方向を描いている場合もある。この場合、正確に味の流れる方向がわかる図 2 は、見方によっては、設計図のように見えるので、具象かも知れないし、対象を映しているわけではないので、抽象かもしれない。図 3 は、何となく形が分かるという意味では、具象なのかも知れないが、抽象とも言えるかも知れない。図 2 に対しては、「アルコールが少きついのがてっぺんに感じる。口の上部には果実味がするが、その外側にはビリ感がある。基本的に滑らかであるが、角がある。」のような記述になる。説明っぽい記述になるので、具象と考えていいのではないだろうか？ 図 3 に対しては、「口に含んだ時はおっつけという感じ。しかし、そのあと、舌の横から水が漏れるように味が消えてゆく。最初の酒の味は広がらず、水のような味が舌を抜けて歯の間から逃げてゆく。「面白い」味。」という記述になるが、やや詩的ではないかと思う。上下などの位置情報を書いておらず、歯のような身体の位置で場所を示している。メタファー的に記述しているので、正確には情景を映しておらず、抽象と考えていいのではないだろうか？ 二つだけ例を出したが、経験的には、やや表現しづらい味に関しては、表現は、抽象になる傾向があり、きちんと説明できる味に関しては、具象になるのではないかと思う。上記の例では、まだ表現しやすかったが、更に表現しづらい味もある。その場合は、完全に抽象になるというか、表現の仕方に苦労する。

3. 抽象と具象の狭間で

偶然であるが、2018 年の 2 月頃に都内の 2 か所で、抽象と具体を対比、融合させた展覧会が開催されていた。府中市美術館で開催されている「絵画の現在」(<https://www.city.fuchu.tokyo.jp/art/kikakuten/kikakuitiran/kaiganogenzai.html>)と損保ジャパン日本興亜美術館で開催されている「クインテット IV — 五つ星の作家たち」(<http://www.sjnk-museum.org/program/past/5165.html>)である。

府中市美術館では、直接対決のような書き方はしていないが、ちらしには、「風景に人物、抽象表現に立体が少し…」と書かれている。風景には津上みゆきの絵が含まれているのだと思われるが、ここでの表記上は抽象と区別しているように思われる。彼女は「風景画は、そこに在る、存在する自然、自然現象、人工物も含む自然の状態のすべてを観察し、そこを平面に置き換え、色や線・形を配置し、そこから風景を連想させることで、初めて成立するトリッキーなものである。」と記している [Kamiyama, 2018]。彼女の絵では、「View, Tokyo Merry-go-round, Winter, 2017」と具体的な場所と季節がタイトルに書かれている。しかし、彼女の絵には実在する風景が描かれているのだが、白内障の手術をした Monet の絵以上に抽象と言えるのではないだろうか？

損保ジャパン日本興亜美術館の方は、ちらしの中で「具象と抽象の狭間の深い闇の中で光を求めて彷徨い続けているのが現代作家たちであり、私たち自身でもあるのです…」と具象と抽象の間で彷徨うをテーマにしている。五十嵐は、「彼女らは理知的な線・形態と感覚的な色彩を組み合わせ、自然を写す(自然主義)ことと自己世界を表出(表現主義)する振幅の中で制作している。…「具象」と「抽象」というカテゴリーの存在さえ意識しないほど、彼女らの制作は自然体であり、また「平面」と「立体」のボーダーにも拘泥していない。」と指摘している [Igarashi, 2018]。実際、田中みぎわは墨絵で、なんとなく風景が見える具象画のように見えるが、室井公美子の作品は、Monet の水連のように一瞬見えながらも、所謂抽象画である。彼女は、「具体的な「形のかけら」を画面に散りばめています。このように見て欲しいというよりも、見る人のそれぞれの記憶によって別の世界が見えてくれればいいなと考えています。…画面とのやり取りの中で偶然できた形や色、絵具の厚みや滴りなどを展開してゆき、私が知らない何かをそこでみたい、そんなことを繰り返している感じです。」と展覧会のカタログで述べている。実際、ある場所を描いているようなタイトルもあるが、抽象っぽい絵画である。このように、現在は、作家たちは、抽象と具象を区別しないで、というか、出来ないで表現をしていると思う。というか、今や、抽象と具象を区別すること自体が意味ないのかも知れない。実際、“the difference between Representational and Abstract Art is the Subject of the art work and we know that subject is a matter of choice. Supporters of Representational Art, while still holding some internal preferences, would not totally discard the choice of a landscape as a subject versus a figurative work or a still life. So, why would we discard a different choice of subject, a non-objective one, as long as the Elements of Art and the Principles of Art are executed with mastery?”

Representational and Abstract Art do not exclude each other. They both present the basic properties of a work of art to be perceived through our senses.” という指摘

[Brooks, 2013] もある。絵という表現形態では、具象と抽象は分け難いということになりそうである。但し、ここまで至るまでに、Kashimir Malewitsch の提言した suprematism (絶対主義) という考えもあった。それは、現実とのあらゆる対応関係を排除した絶対的な抽象を志向したもので、白黒の円や正方形のみを構成要素とする「無対象」絵画を描くものであった。彼は、写実的な絵画のような従来の芸術を、具象としての自然を単に模写したものとして斥け、芸術はそれ自体が自然から独立したものであるべきだと唱えた^{*2} [Malewitsch, 1927]。酒の味を表現する時は、「無対象」を描く訳ではないし、人間にとって、行動するときに現実とのあらゆる対応関係を排除することはありえないので、この考えは、面白いが、使わない。更に書くと、スターリン体制下になると一転してこれらのロシア・アヴァンギャルド芸術は、絵画だけではなく、全て弾圧を受けることとなったので、結局、最後は具象絵画に戻った。社会体制の所為なので、決して抽象絵画 ≤ 具象絵画という意味ではないと思う。従って、上記したように、現在の絵画で具象、抽象を区別することは意味がないことなのかも知れない。

4. まとめ: 酒の味を記述することの耐え難い難しさ

本研究は、まず、日本酒の味の表現できることばが少ないという現実から始まり、更に、昨年の人工知能学会全国大会 [Abe, 2017a] や IJCAI2017 のワークショップ [Abe, 2017b] で議論した味の表現の仕方に就いて絵を用いることで、表現が拡張できるという話につながっていく。

味は、形が見えない? 表現はするが.... それは、メタファーの場合もあるし、絵で描くこともある。一方、絵画は conceptural art 以外はメタファーでは恐らく表現しない。図式的には、

味 — 絵 (形) — 抽象画/具象画
となるが、前節で現在の絵画で具象、抽象を区別することは意味がないと指摘したようにここで、味を表現する絵が抽象画 or 具象画であるかを決定することは意味がないかも知れない。更に言うと、Malewitsch の提言したような、白黒の円や正方形のみを構成要素とする「無対象」絵画を描く suprematism (絶対主義) は酒の味の表現ではありえないと思う。確かに、ことばでの表現も形の組み合わせとも言えるかも知れないが、偶々形の組み合わせになっただけで、形のみを構成要素と限定はできないと思う。ことばでの表現が難しい時に、形でことばの表現を補うだけである。

ワインの表現では、“hints of forest floor and earth” のように実際の物質ではあるが、それそのものではなく、ある風景を示唆することで行う。しかし、決して風景を描写している訳ではない。そこから得られるイメージを描いているのである。そういう意味で、津上みゆきの絵に近いかも知れない。日本酒でもこのような描き方はできるかも知れない。

ここで、最初の問いに戻る。日本酒自体を絵で描く訳ではないが、味を表現する時には頭の中に“味の絵”を描いているはずである。それは、具象であろうか? 抽象であろうか? ここまでの議論では、区別することに意味はないとなってしまうのである。現在の絵がそのようになってきているので。味の表現は、津上みゆきのような表現でいいのではないかと思う。わず

かに、具象的な要素を残しながらも抽象的表現を行う。いずれにせよ、当初の目標である、日本酒の辞書を作ることは早くしないといけないと思う。そこに含まれることばは、具象でもあり、抽象でもあることばになると思う。

参考文献

- [Abe, 2016] 阿部 明典: 味覚の表現, 2016 年度 人工知能学会全国大会 (第 30 回), 3M3-OS-20a-1 (2016)
- [Abe, 2017a] 阿部 明典: 味ことばの表現に関して — 手書き/電子化入力, 2017 年度 人工知能学会全国大会 (第 31 回), 2P3-OS-18b-2 (2017)
- [Abe, 2017b] Akinori Abe: About the better expression of taste, *Proc. of the 2nd. Int'l Workshop on Language Sense on Computer in IJCAI2017*, pp. 28–34 (2017)
- [Brooks, 2013] Hebe Brooks: Representational versus Abstract Art, <https://noapsblog.com/2013/08/12/representational-versus-abstract-art/> (Posted on August 12, 2013)
- [Fukushima, 2013a] 福島 宙輝: 日本酒味わい事典, 慶應義塾大学 (2013)
- [Igarashi, 2018] 五十嵐 卓: 『クインテット IV』出品作家たちの視座: 具象と抽象の狭間, クインテット IV — 五つ星の作家たち, 損保ジャパン日本興亜美術館, pp. 7–9 (2018)
- [Jensen, 1999] Jensen R.: *The Dream Society: How the Coming Shift from Information to Imagination Will Transform Your Business*, McGraw Hill (1999)
- [Kamiyama, 2018] 神山 亮子 編集: 絵画の現在, 府中市美術館 (2018)
- [Kawabata and Fuchigami, 2016] 川端 晶子、瀬上 匠子 編: おいしさの表現辞典 新装版, 東京堂出版 (2016)
- [Malewitsch, 1927] Kasimir Malewitsch: *Die gegenstand-slose Welt*, BAUHAUSBÜCHER ()
- [McQuaid, 2015] John McQuaid: *Tasty: The Art and Science of What We Eat*, Scribner (2015) (中里 京子訳: おいしさの人類史, 河出書房出版社 (2016))
- [Otsuka, Suwa, and Yamaguchi, 2015] 大塚 裕子, 諏訪 正樹, 山口 健吾: 創作オノマトペによる日本酒を味わう表現の研究, 2015 年度 人工知能学会全国大会 (第 29 回), 2N5-OS-16b-5 (2015)
- [Seto, 2003] 瀬戸 賢一 編著: ことばは味を越える 美味しい表現の探求, 海鳴社 (2003)
- [Velasco et al., 2015] Carlos Velasco, Andy T. Woods, Ophelia Deroy, and Charles Spence: Hedonic mediation of the crossmodal correspondence between taste and shape, *Food Quality and Preference*, Vol. 41, pp 151–158 (2015)

^{*2} Unter Suprematismus verstehe ich die Suprematie der reinen Empfindung in der bildenden Kunst. Vom Standpunkte des Suprematisten sind die Erscheinungen der gegenständlichen Natur an sich bedeutungslos; wesentlich ist die Empfindung — als solche, ganz unabhängig von der Umgebung, in der sie hervorgerufen wurde.